

Steps for the BETTER FUTURE

業種の垣根を越えた “日本型”の スマートシティ 開発の可能性



豊田啓介氏



曾我新吾氏

とよだ・けいすけ／1996～2000年安藤忠雄建築研究所、02～06年米ニューヨークの建築設計事務所SHoP Architectsに勤務。07年より東京と台北をベースに、蔡佳宣・酒井康介両氏と共同でnoizを主宰。建築や都市領域へのデジタル技術の導入と、新しい価値体系の創出に積極的にかかわる。17年、gluonを金田充弘氏と共同設立。東京大学生産技術研究所客員教授。20年、大阪コングランド・リビングラボ ディレクター。

新しい時代のまちづくりとして、スマートシティ開発が国内外で動き出している。スマートシティは街や暮らしをどう変えるのか。企業に期待される役割とは。建築家・豊田啓介氏と、まちづくりに取り組む三菱商事の社員による座談会の模様を全3回にわたって紹介する。

【座談会参加者】豊田啓介氏(建築家、noiz/gluonパートナー、東京大学生産技術研究所客員教授)、曾我新吾氏(三菱商事 複合都市開発グループ 都市開発本部 事業開発室 総括マネージャー)、荒木美奈子氏(三菱商事 複合都市開発グループ 都市開発本部 都市開発部)、宮崎 望氏(三菱商事 複合都市開発グループ 都市開発本部 事業開発室)
※荒木氏と宮崎氏は次号登場

【監修】The Asahi Shimbun
GLOBE+

【聞き手】堀内 隆(GLOBE+編集長)

——スマートシティは一般的に、「ICT(情報通信技術)などの活用によって社会課題の解決を目指す都市・地域」と定義されますが、思い浮かべる街のイメージは人それぞれだと思います。スマートシティをどんな街とらえていますか。

豊田 これまでの産業の変遷から考えてみます。1980年代は、日本の「モノづくり企業」が世界を席巻していました。90年代に入ると大手ポータルサイトのような「情報プラットフォーム」が登場しましたね。その後、「情報プラットフォームでありながらモノも扱う」企業が出てきました。

さらに近年は、「モノの情報を編集する」ことにより、既存の車や建物などを効率的・経済的に扱うことが可能になりました。自家用車が時にタクシーになったり、住宅が時にホテルになったり。今後はタクシーやホテルといった単一領域にとどまらず、都市のあらゆる領域を複合的に扱う流れになっていくでしょう。こうした「モノの世界と情報の世界を高次元・高解像度でつなげるプラットフォーム」がスマートシティの本質といえます。

——スマートシティ開発における日本企業の立ち位置や可能性をどう見ていますか。

豊田 今日のスマートシティ開発のありようを分類すると、いわゆるITジャイアントが膨大な資金力・技術力を投入して1社主導で進める「米国・中国型」と、開発したシステムはオープンにしつつ社会還元を意識しながら国・自治体が運営していく「欧州型」があり、いずれも一長一短です。そのどちらでもない「日本型」が

実現すれば、世界と戦える可能性は十分にあると考えています。それが、高い技術開発力を有する日本企業が業態・業種の垣根を越えて集う、企業連合型のスマートシティ開発です。

曾我 いままでなかったような、専門や事業領域を越えてメンバーが集まることで生まれる“化学反応”というのはたしかに広がりつつあり、きちんと全体をまとめていくことがスマートシティとして重要ですね。

豊田 日本のものづくり企業が持つ知見やノウハウは大きな強みですが、モノと情報を接続するにあたって、情報に翻訳する言語を持ち合わせていないことがネックでした。モノづくり企業をはじめ色々な企業が技術ノウハウやデータを共有し補完し合うことができれば、日本は世界有数のスマートシティのプラットフォームになれる可能性があります。そこには業態を横断した新しい動きが求められるので、分析機能も備えた商社がプレーヤーになると考えています。

——三菱商事は、すでに国内外でスマートシティ開発に取り組んでいますね。業態・業種の枠を越える必要性をどう考えていますか。

曾我 三菱商事はいま、東南アジア及び国内でスマートシティ開発を進めていますが、不動産開発のみならず、モビリティ、エネルギー、リテールなど非常に多岐にわたる領域が関わっています。我々が目指しているのは、あくまでも

社会課題解決や住民のニーズに応えていくこと。それらを起点に事業領域を横断し、適切に役割分担することを大切にしています。

豊田 現状のスマートシティ開発では、各企業が扱うデバイスや技術を売ることが念頭に置かれているケースがあります。これでは単体のマーケットで競り勝っても、本格的なスマートシティ実装の際に互換性がなく役立たないということになりかねません。スマートシティを実現するには、業態ごとに閉じた従来のビジネスを一旦解体し、再構成・共通化するプロセスが必ず必要になります。そこで、三菱商事のようにさまざまな産業と関わっている企業にインテリジェントな「メディウム(媒介者)」としての役割を担ってほしいと期待しています。社会全体のエコシステムを作り上げるうえでも、まずは商社という1社のなかであれば実証実験がしやすいのではないかと考えています。

曾我 多種多様な産業に広く深く関わっているという“接地面積”の広さは我々の強みです。今はIT・情報サービスをはじめとするスタートアップ企業との協業も増えています。企業や業態・業種の枠を越えて集まれる場や架け橋になり得るという立ち位置を生かし、今後もスマートシティ開発に取り組んでいきたいと考えています。

次回は、三菱商事がいま進めているスマートシティ開発について語り合います

こちらの記事はGLOBE+でもご覧いただけます
<https://globe.asahi.com/brand/mitsubishicorp/2021>

座談会の動画はこちらからご覧いただけます▶

